
「アイ・フィール・ライク・ゴーイング・ホーム」

ココナツ・サム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「アイ・フィール・ライク・ゴーイング・ホーム」

【Zコード】

N7093D

【作者名】

ココナツ・サム

【あらすじ】

他人事だと思っていたが、しょぼいオヤジも癌にかかる。どうせつまらない人生だからこのまま終わらせてもいいんだが・・・。若い頃の思い出をたどつてみたら、それなりに楽しく時間を過ごせた。生きてきた足跡は残せないけれど、これで満足して逝ける。

「安田、正直なところ、俺の体はどうなんだ?」

「胃潰瘍ってやつだな。ちよつと悪くなつてゐるが、辛抱すれば治る。」

「嘘つけ。俺は前にも胃潰瘍になつたことがあるけど、こんなじやなかつたぞ。大体、胃潰瘍なら薬出すなり手術するなりしろよ。検査ばかり何度もやつてるけど、本当は癌なんぢやないのか。」

「うーん、そう言われてもなあ。」

「分かつた。じゃ、レントゲンとかデータ寄こせ。他の病院で聞いてみる。セカンドオピニオンってやつだ。そこで癌だと分かつたら、お前、もう友達じやないからな。」

「・・・・・。」

「いいか、俺はな、癌なら癌でしじうがないと思つてゐるんだ。癌でも治る可能性があるなら戦つ。でも、治らないのなら、騙し騙し命を長らえるよりも残された時間を大切にしたいんだよ。正直に言つてくれ。俺は癌なのか、癌じやないのか。」

俺は黙つている安田を睨みつけた。

「最後だぞ。お前が癌じやないと言つながら、俺はお前を信じる。でも、癌だつたら正直に言わんと許さん。」

「・・・分かつた。じゃあ、本当のことを言へ。」

安田はため息をついた。

「お前は・・・癌だ。」

「・・・やっぱりな。で、どうなのよ。治る見込みはあるのか?」

「まだ検査は全部終わつていないが、あちこちに転移している。正直なところ治すのは難しいだろ。」

「そりゃ。俺に残された時間はどれくらいある?」

「治療の仕方にもよるが、あと・・・半年くらいか。」

「半年か。よくあるパターンだな。」

安田は俺の方に向き直った。

「俺は告知はしない主義だつたんだが、初めて告知するのがお前だとはな。運命のいたずらつてやつを感じるよ。」

そうか、やっぱり癌か。覚悟はしていたけど、実際そうなってみるとさすがにキツイな。

別に今まで節制した生活を送っていたわけじゃないけど、まさか自分がかかるとは。

しかもあと半年の命だ。半年経つたら俺はこの世から居なくなっちゃうんだぞ。

と言つても実感は全然ないけどな。

よくこういう時景色が違つて見えると言つが、マンションに帰つてきてもいつもと同じだ。狭つ苦しい殺風景なワンルームにベッドとテーブルとテレビだけがある。何も変わりやしない。コーヒーの味もいつもと同じだ。

それにして安田にはちょっと懇意なことをしたかな。

医者として常に患者の生死と向かい合つているとはいえ、中学からの親友である俺に引導を渡す役目をさせたんだから。俺より奴の方がショックで落ち込んでいるんじゃないか。まあ、もう一十年来の付き合いということで許してもらおう。奴と俺の間に隠し事はないはずだ。

それにして皮肉なもんだ。今までやつてきたことのツケが回つてきたのか、それとも神様とやらのバチか。

四年前に俺の浮気が原因で息子の健一を連れて出て行つた弘美もいゝ気味だと思うだろうか。

あの頃俺たちの間に愛はなかつた。健一は今でも可愛いけれど、弘美の冷たい目を見るだけでぞつとする。もともと俺は結婚には向いていなかつたんだ。

見てみる、四十歳目前にして一人でワンルームマンションで暮らしているけれど、何の不便もないじゃないか。洗濯だけは面倒だけど、食事はコンビニや居酒屋で済む。ワイシャツはクリーニング、物がないから掃除はたまにやればいい。休みの日はびくせ寝ていいるだけだし、テレビもパソコンもある。

一人で寂しいなんて思ったこともない。誰にも気を使わず、何の気兼ねもなく暮らせるのは気楽だ。

でも、金はないな。ほとんど健一のために送っているからな。慰謝料と養育費つてやつだ。まあいい、どうせ金なんか使わないし。ただ毎日メシが食べて、生きていけばいいんだ。

待てよ？ しばらく経つたらメシも食えず、生きてても居られないのか。そういえば生命保険はどうなつているのかな。会社で入ってくれているやつと、保険のおばちゃんに強引に入られたやつがあつたはずだ。確かに受取人は全部健一にしてあつたはずだが、癌で死んでももらえるのだろうか。後で電話して聞いてみよう。でも、おばちゃんにばれちゃうとまずいのか？ どこか相談センターみたいのがあるだろ？ 後で書類を捜してみよう。

「課長、最近痩せましたよね。」

「そりゃ？ ダイエットしてるわけじゃないんだが・・・。中年太りならぬ、中年激やせかな。」

「バカなこと言つてないで、やるやろちゃんとした方がいいんじゃないんですか。食事だつてどうせコンビニとかばかりなんでしょう？ 体壊しますよ。」

「俺があと十五歳若かつたら新しい相手を探す」とを考えてもいいんだけどね。この歳になつたらもうその気も失せた。」

「課長があと十五歳若かつたら私も考えてあげてもいいんですけどね。もうオヤジだからダメです。」

「そりゃ、俺は仕事ばかりしてどんどんしょぼいオヤジになつていく

んだ。

「なんか、湿布薬の匂いがしてきそう。」

俺がこのちっぽけな商事会社に勤めてもう十四年になる。大学時代にアメリカに留学して、人より少し長く学生をやっていたが、英語が話せたおかげで同じ年の奴らと同じくらいには出世している。と言つてもせん社員百人程度の会社だからかが知れているが。実は留学していたと言つても勉強以外のことばかりしていたから大したものじゃない。会社は知らずに俺を雇つたけれど、俺はアメリカではほとんど学校には行つてない。俺がアメリカで何をやつていたかを知つているのはホストファミリーのビッグママとブラザー達だけだ。

この会社の給料は悪くない。大手一流会社と同じくらいとは行かないが、ここしばらく景気がいいので給料も上がるし、ボーナスも結構出る。

先週がボーナスだったのだが、なんと四ヶ月分も出た。銀行に入れてある金と合わせたら半年や一年は働く間に暮らせる。半年や一年・・・俺の命より長いじゃないか。と言つことは、俺はもう働く必要はないんじゃないのか？

遊んで暮らすとは行かないけれど、毎日スーツを着て出勤しなくても死ぬまで食つていける分はある。

そう思うと仕事をするのが馬鹿らしくなった。午後からは何もせずただボーッとして過ごした。俺はやっぱりダメ人間だ。必要がなければ、できるだけ楽をしようとする。

かと言つて仕事をしないと、いや、正確には会社に来ないと、やることがなくなる。

この歳でマンションに引きこもつて、見つかった時には一人で死んでいた、なんて、いくら俺でも惨め過ぎるだろう。

「部長、今、時間いいですか？」

「ああ、どうした。」

「ちょっと込み入った話なんで。」

「じゃあ、会議室に行こつか。第一でいいかな。」

「ちょつと込み入った話なんで。」

他に誰も居ない第一会議室で、俺は部長の前に白い封筒を出した。

「実は、退職したいと思いまして。」

「ちょっと待て。まずは話を聞かせる。どうこつか?」理由は?

「一身上の都合です。」

「それは形式上の言葉だ。なぜ辞めたいんだ?待遇が気に入らないのか?それとも、どこかから引き抜かれたか?」

「そんなんじやありませんけど、辞めたいんです。」

「次は決まってるのか?」

「いえ、探す予定もありません。」

「バカなことを言つた。今辞めてどうする。世の中の景気はそんなによくないし、すぐには次は見つからないぞ。それとも、自分で会社でも始めるのか?」

「そういう景気のいい話だといいんですけど、そんなんじやないんですね。ただ、やりたいことがあると言えばあるんですけど、仕事じやありません。」

「仕事しないでどうやってやつていくって言つんだ。ちょっと冷静に考えてみる。これは俺が預かっておく。少し休暇をやるから休むといい。休暇が明けたらもう一回俺のところに来い。」

やれやれ。ほほ予想通りの展開だ。本かなんかで読んだことがあるけど、本当にあんなことを言つんだな。まあいい、これでとりあえずしばらくは会社に行かなくていい。

黙つて、ただ行かなくなつてもよかつたんだが、俺は気が小さいからそんなことはできない。毎日気になつてしまふがいいだろう。そんなどこを氣にしても意味がないんだけどな。どうせもうすぐ死ん

じゅうんだから。

でも見てみろ。引き止めてはくれたけれど、結局俺が会社に行かなくて、会社には何の影響もないじゃないか。コンピューターに入った資料を全部渡して、それで完了だ。俺なんて、それほど役に立つてなかつたし、居なくなつてもどうと言つことはないのさ。いくらでも代わりはある。

それにしても会社に行かないつてのは退屈なもんだ。いつの間にかすっかりサラリーマン体質が染み付いちまつたんだな。毎日プログラミングしているのも何だか落ち着かない。やっぱり、決まった時間に起きて、何時までに会社に行かなければならんといつていう生活の方が楽なんだよ。何も自分で決めなくていいからな。それで毎日が過ぎて、給料をもらえる。俺みたいな人間にはサラリーマンが向いている。

働いている時には休みが欲しい、特にまとまった休みが欲しいとずっと思っていたけど、それも働いているから思うことで、多分俺が普通の状態でずっと休んでいたら、すぐに「働きたい」って思うだろうな。

どうでもいいか。働くのが働くまいが、休もうが休むまいが、あと数ヶ月で俺は死ぬんだから。

安田には格好いいこと言つたけど、癌だと分かつても全然残りの時間大切にしていない。ただ毎日何となく過ごしてるだけだ。死ぬ死ぬと言つているけれど、まったく実感がない。だからこうしていられるんだけど、体の調子も前と変わらないしな。俺みたいなダメ人間には、後ろを切られても、追い詰められないとダメらしい。でも頭では分かつてるんだよ。こんなことしてる場合じゃないってな。もつたひないと言えばもつたひない。普段出来ないこと、つていうのも変だけど、そういうことをやつておくか。どうせ最後には悔いは沢山残るだろうけど、せめて一つだけでも何かやつておくか。あーあ、俺も若い頃はこんなんじゃなかつたんだけどな。あの頃は結構・・・そうか、そういう手があつたか。それもいいかもな。ど

うせ他人をやることもないし、そうするか。

この街に來るのも久し振りだな。だけど、あまり変わつてない。あの頃と同じ田舎町のままだ。

俺がどこに居るかつて？アメリカだよ。南部の、とある田舎町とだけ言つておこう。実はここには俺が学生時代に留学していた街だ。余命いくばくもない俺が、最後にやつておこうと思つたのがこれだつてわけや。

それにしても体力が落ちた。飛行機での長旅はキツかった。段々メシも食べられなくなってきたから、体重も落ちている。病気が進んでいるのかな。あれから病院に行つていなからな。安田の怒った顔が目に浮かぶ。

「ああ、そこを左だ。」

結構道も覚えているもんだ。うろ覚えで自信がなかつたが、この愛想のないタクシー運転手のおかげで何とか着いた。

ここはまるで時間が止まつているかのようだ。新しく建つた家もない代わりに、なくなつた家もない。あそこの角の電球なんか、俺が居た頃から切れたままじゃないのか。

家の前に立つた。十四、五年ぶりといったところかな。覚えているだろうか。

「ただいま、ビッグママ。」

「おかえり、リョウ。」

覚えていた。お帰りの声も、言い方も、あの頃のままだ。一気に時間が戻つたような錯覚に陥つた。

「ママ、覚えていてくれたんだ。」

「自分の子供を忘れる母親がどこにいますか。大体、この街に出入りする日本人なんてあんたくらいのもんだよ。それによってもあんたはほつといたらいつまでも帰つて来ないね。毎年のクリスマスカー

ドがなかつたら、生きてるのか死んでるのかさえも分からなこよ。

「ごめんよ、ママ。」

「元気だつたかい。」

「まあね。ママは?」

「相変わらずや。あんた、随分瘦せたね。」

「ああ、ママも老けたな。」

「当たり前じやない。いくつになつたと思つてゐるの。私にはもう孫が十五人も居るんだよ。あんた、結婚は?子供は?」

「ああ、結婚はしたけど別居してゐる。男の子がいるけどカミさん連れで行つた。」

「そうかい、淋しいねえ。」

「皆はどうしてる?」

「そつそつ、ジョンは七年前に死んじまつたよ。交通事故でね。」

リビングにジョンの写真が飾つてあつた。

「ボビーはいい会社に入ったよ。今ゴーヨークにいる。ライアンは隣町の工場勤めさ。キヤサリンは結婚してアトランタに行つたし、今ここに残つてるのは末っ子のジェイソンだけさ。」

「そうか。皆、俺が来たと言つたら驚くかな。」

「驚くに決まつてるじやないの。行方不明だつた六人目の兄弟が急に帰つてきたんだからね。」

当然のことだが、ビッグママ達と俺は血がつながつていない。俺は日本人、彼女達は黒人で、本当なら俺とママ達は単なる留学生とホストファミリーに過ぎない。

でも、俺がここに住んでいた四年間、日本人を初めて見た彼女らに最初は珍しがられたが、すぐに家族同様、いや、それ以上に扱われた。ママにはよく叱られたり、ブランザーたちとはよく悪いことを一緒にしたものだ。

そのうちにジェイソンの嫁が子供達を連れて帰つてきた。お世辞にも美人とは言い難いが、性格の良さそうな、働き者そうな嫁だった。

その夜ジョイソンが帰ってきたうな時間に俺達はちょっとしたいたずらを仕掛けた。

表にジョイソンのトラックが見えると、俺は急いでシャワーを浴びに行つた。そして、タオルで頭を拭きながら何食わぬ顔をして出てきた。

「ママ、シャンプーが切れてるよ。」

その時のジョイソンの顔と言つたら、『真を撮れなかつたのが残念だ。』

そしてその夜は久し振りにママの手料理を食べながら、皆で夜遅くまで話しこんだ。

次の日はゆっくり寝ていたのだが、夕方になると密が沢山やつてきた。手に手に料理と酒を持つて。

「何かのパーティかい？」

「あんたがやつと帰つてきたから皆で祝うんだぞ。」

俺の歓迎会と言う割には、みんな既に飲み食いして盛り上がっている。

中には知つている顔も沢山あつたし、知らない奴も沢山居た。どうしても名前を思い出せない奴も何人かいた。

でもそんなことは関係ないらしい。いつしか俺もその輪の中に入っていた。

宴もたけなわの頃、ママが奥からギターを持ってきた。

俺がここに住んでいた頃に街の質屋で見つけて買つてきた安物のギターだ。まだあつたんだ。

「リョウ、あんた、歌つてみなさい。」

「ええ？俺、もう十何年も歌つてないよ。」

「いいから。」

俺は弦の音を合わせた。あれ？弦が新しいぞ。そうか、ママ、朝から居ないと想つてたらこれを買いに行ってたんだな。

皆がニヤニヤしながら俺を見ている。あの頃もこうだつたな。俺は、マディ・ウォーターズのアイ・フィール・ライク・ゴーイング・ホームを歌いだした。

「この子は日本人のくせにブルーズが好きでね。ここに住んでた頃もマディ・ウォーターズばかり歌つてたのよ。」

ママが俺の知らないおっさんに説明している。

そう、実は俺がここに住んでいた四年間、学校にも行かずに毎日ブルーズばかり歌つていた。

あの頃の俺はブルーズに夢中で、アメリカに来たのも、黒人の家にホームステイしたのも、そうすれば何かをつかめるんじゃないかと思つたからだ。そうでなければ、こんな何もないど田舎に住むものか。

あの頃は何回歌つても、ママに「あんたは技術的にはいい線行つてる。でも、ブルーズの心が分かつてない。」と言われたものだ。俺はそれが悔しくて、何度も何度もレコードを聞いて、何回も歌詞を読み直したものだ。

歌い終わると、皆が拍手してくれた。俺は、少しほうまくなつたのかな。

「あんたのジャパーンズ・アクセントは相変わらずね。」

ママが微笑みながら言つた。そして、こう続けた。

「あんた、明日から街に出て路上で歌つてきなさい。」

元々何かあてがあつてここに来たわけじゃない。ただ何となくママに会いたくて来ただけだ。

來たからと言つて特にする事もなくぶらぶらしているだけだから、歌うのも悪くない。

日本じゃ路上ライブなんてのは若い子の特権みたいなもんだが、こ

こならどうせ俺を知つてる奴もないしな。

この歳になつて人前で歌うなんて思つてもいなかつた。もう歌わなくなつて何年経つだろう。

会社で働いていた頃も、カラオケだけは頑固に断り続けていた。別にそれに意味はなかつたけれど、一度は本気で歌を志して、それを途中で投げ出してしまった心の傷つてやつかな。でも、俺は所詮中途半端なダメ人間だから、どうせ投げ出さなくともモノにはなりっこなかつたけどな。

それにしてもママはなんであんなことを急に言い出したんだろう。人前で歌つて練習しろって意味なのか、恥かいてうまくなれって意味なのか。それとも、毎日家にずっと居られても困るから、ちょっとは表に出なさいって意味なのか。

まあいい。しばらく忘れていたけれど、確かに俺は歌つてさえいれば幸せなのは確かだ。

残り少ない命、楽しく過ごせそうだ。

それにしてもこのギター、弦は張り替えてあるけれど埃は一切掃つてない。明日からまた俺の相棒になるんだから、こいつを綺麗にしてから寝るか。

さて、ママの口車に乗つて街まで来たのはいいものの、俺は一人で路上ライブなんてやつたことないぞ。どこで何をどうすりやいいんだ？

なんだか皆俺をじろじろ見るな？俺、どこか変かな？あ、変だわ。今ここ歩いている人間で肌が黄色いの、俺だけだ。しかもギターを裸で持つてる。いかにもこれから歌いますって感じだ。

黒人しかいない街に東洋人のおっさんが一人でやってきて何をやるんだ、とか思つてゐんだろうな。

やばい、目つきの悪い集団がいる。目を合わせちゃダメだ。見てみろよ、あいつの腕。俺の胴回り位あるぜ。あんなのに絡まれたらお終いだ。残り少ないとほいえ、俺はまだ命が惜しい。
もっと人の少ない所に行こう。いや、何言つてんだ、俺。人がいない所で歌つてどうする。でも、怖いんだよ。若い頃は平氣だつたけ

ど、この歳になつてこうこう環境に居るとやつぱり怖い。

別に黒人を差別してゐんぢやないんだよ。日本でもそつだ。今の若い奴は何を考えてるか分からんからな。何もしなくてもいきなり襲い掛かってくる。

一度オヤジ狩りつてのにあつたことがある。あいつら、面白がつてやるんだな。さんざん殴られ蹴られした拳句、財布ごと持つて行かれた。それ以来、若い奴がたむろしているところには近寄らないようになっている。

この辺がいいかな。ここなら結構明るいし、いざとなつても人目があるから殺されるようなことはないだろ？

俺はギターを持つて歌いだした。もちろん、誰も聞いていない。ただがらんとした道路に向かつて一人で歌つていた。一々三曲歌うと立つてゐるのが辛くなつた。何だよ、俺はこんなに体力がなくなつていたのか。近くに捨てられた箱があつたのでそれを持ってきて座つた。こりやあい。これならもうしばらく歌つていられる。
結局その日は一人の観客もないまま終了した。

次の日も、あくる日も同じだつた。

四日目、いつものように一人で歌つてゐると、酔っ払いらしき一団が近づいていた。ちょっとやばいかとも思つたが、特に何もしてくるわけではなく、ちょっと離れたところから俺の方を見ている。しばらく聞いていた後、誰からともなく帰つていつたが、その間際、一人が俺の方に何かを投げた。暗くてよく見えないが、石でも投げられたのか。でかい奴だつたら当たつたら痛いな。ああ、違う。これは二十五セント硬貨だ。^{クォーター}

俺にはその意味が分からなかつた。馬鹿にされて嫌がらせられるのか、チップしてくれたのか。

まあいい、いい方に解釈しておこう。俺が始めて歌で稼いだ金だと思おう。

帰つてからそのコインに穴を開けて首からぶら下げた。

そんなことがあったのもその日だけで、それからは誰も観客がいな
いまま何日かが過ぎた。

そして十日くらいたつた時だ。いつもの場所に向かつて歩いている
と、知らない男に声を掛けられた。

「お前、まだあんな所で歌つてるのか？」

「・・・誰だつけ？」

「あそこはやめとけ。密なんて誰も来やしないぞ。」

「・・・誰だつけ？」

「大体あそこはな、ちょっと先に行くとドラッグの取引場所がある
んだ。だから、まともな奴はあそこには近づかない。」

「・・・誰だつけ？」

「俺がもつといい場所を教えてやる。今日からそこで歌え。」

「そうか、ありがとう。で、お前は一体誰なんだよ。」

話し振りでは俺のことを知つていそうだが、俺はこいつを知らない。
知らない奴の言つことをそのまま聞くのは何となく嫌だった。

「お前の歌を聞いた奴がそんなに沢山居るのかよ。一週間くらい前、
クオーター投げてやつたろうが。」

「ああ！あれがお前か。まだ持つてるぜ、そのクオーター。」

俺は胸にぶら下げたコインを出して見せた。

「お前、面白いことする奴だな。案内するよ。ついて來い。」

「この辺だ。どこかその辺の空いてるところで歌え。」

なるほど。この辺なら人通りもあるし、商店も皆閉まっているから
商売の迷惑にもならない。それに、一定の間隔を置いてミユージシ
ヤンが立っている。

街の反対側ばかり見ていたが、こちら側にはこんな場所があつたの
か。

「とこりでお前、名前は何て言つんだ？」

「リョウだ。」

「リョウか。俺はBB。皆に紹介してやるよ。」

「BBはこの辺では顔が効くらしい。」

「あの、前もって言つておくけど、俺、場所代とか払えないぜ。」「馬鹿、お前なんかから金取れるかよ。ま、稼いだらメシでもおごつてくれよ。」

紹介が終わると俺は適当な箱を見つけ、そこに座つて支度を始めた。「どうしてお前は立つて歌わないんだ？」

「生憎と体力がなくてね。立つて歌うと三曲が限度なんだ。」

やはりここは場所がいいらしい。歌つていると結構皆立ち止まつて聞いてくれる。と言つても、その半数、いや、殆どが黄色人種がブルーズを歌うのが珍しくて立ち止まつているだけだが。どうやらBBもその一人らしい。

「なあお前、中国人か？」

「日本人だ。」

「日本人だつて？金持ちの日本人がなんだつてこんなどこで歌つてるんだ。日本人が行くのはディズニーランドかラスベガスかニューヨークだろう。」

「日本人にも金持ちじゃない奴は居るんだよ。」

「なるほど、確かにそうらしい。」

「大きなお世話だ。」

「金持ちじゃない日本人を見るのも初めてだが、ブルーズを歌う日本人を見るのも初めてだ。まあ、どっちにしても日本人を見ること自体初めてだがな。」

「俺は初めて本物の黒人を見てから四十年近く経つし、ブルーズを歌うようになつて三十年近く経つよ。」

「なるほど。どうやらそれは出まかせじやないらしい。じゃ、少し一緒にやるか？」

BBはどこから見つけてきた空き缶を前に置くと、ポケットから

ハーモニカを取り出した。

「その缶、どうするんだ？」

「まあ、見てるって。」

俺のギターに合わせてBBはハーモニカを吹き出した。こいつ、かなりうまい。

ところが、そんな事で驚いている場合じゃなかつた。

こいつの歌声を聞いて鳥肌が立つた。
話し声からは想像もつかない、しゃがれているのに艶があり、何より魂が震えるような声なのだ。

ああ、ブルースって、こいついう事なのか、と思つた。魂と、血に染み込んでいるものが違うのだ。俺たち日本人はどんなに頑張つてもそこには到達できそうにない。三十年歌つてきていても、BBのようなその辺のあんちゃんにすら全然かなわない。

「何やつてるんだ！お前も歌え！」

BBの声で我に返つた。そうか、俺も歌わなきゃ。聞き惚れてる場合じゃない。

といふが一緒に歌つてみると、いい感じで声が絡むことに気が付いた。

声質が合つているのか、それともBBが合わせてくれているのか。どっちでもいい。歌つていて気持ちがよかつた。

いつの間にか観客が増えていた。黒山の人だからと言つてもいいくらいだ。

そうか、こいつもみんなBBの歌の素晴らしさが分かるんだな。誰からともなく空き缶にチップを入れていく。あつという間に缶は一杯になり、入りきらないコインや一ドル札があたりに散らばつている。

BBが俺に目配せをした。目が、空き缶はこのために置いたんだよと言つていた。

何曲か歌つて、BBが「Thank You！」と言つて終わり

にした。

ものすごい歓声だった。皆BBの力だ。こいつ、すごい。
でもちょっと待て。観客は俺に向かっても叫んでいる。そうか、俺
も少しは認められたのか。

BBが話しかけてきた。

「楽しかったな。」

「ああ、楽しかった。でも、お前、すごいな。あんなに歌がうまい
とは思わなかつた。」

「こう見えても、俺も生まれた時からブルーズを歌つているからな。」

「そうか、そうだな。やっぱりブルーズは黒人のものなんだな。俺
たちみたいな余所者がどれだけ頑張つてもかなわない、今日それを
思い知らされたよ。」

「いや、お前はこのままずつと歌い続ける。」

「ああ、でも、俺はやっぱり日本人だからな。」

「日本人でもいい。歌い続ける。お前にもその意味がいつか分かる。」

「
BBとはそこで別れた。またいつか一緒にやることがあるだろうか。
願わくば、死ぬ前にもう一度くらいはやってみたいが、俺には時間
がない。多分叶わぬ望みだろつ。
ちょっと興奮したまま家に帰つた。
その夜、血を吐いた。

それからというも、俺は毎日その場所で歌つた。

BBのおかげなのか、その場所はいつも俺のために空いていた。多
少遅れて行く日があつてもだ。

観客も少しづつ付きはじめ、歌うことに張りが出てきた。楽しかつ
た。

しかし、そうしている間にも癌は確実に俺の体を蝕んでいた。

血を吐いたあの日以来めっきり体力が落ちたし、メシも喉を通らなくなってきた。

鏡を見たら日に見えて痩せているし、最近では血を吐いても驚かなくなつた。

体のあちこちが常に痛かった。

毎日歌うことが辛くなり、三日に一回くらいは遅く行つたり早めに切り上げたり、時々は休むこともあった。しかし、歌うことやめなかつた。

残された時間が短いであろう事は感じていたが、楽しければそれでいい。

所詮俺なんかが頑張つてみたところで何かを残せるわけでもないし、そんなに大した人間でもない。

俺が死んだところで世の中は何も変わりはしないし、どこにでもいるような人間が一人居なくなるだけだ。

変な氣負いもなかつたし、悲壮感なんてのもなかつた。ただ毎日が同じように、予定通り流れていた。

やがてカレンダーを見て気づいた。

安田に会つた日からもう半年以上過ぎている。半年と言われた寿命を、もう過ぎている。

すごいじゃないか、俺。

まだやりたいことは沢山あるけれど、多分もう十分生きたのだろう。後はいつ逝つてもおかしくない。

こういう時は、「後はせめて精一杯」とか「生きた証を」とか言うんだろうが、端から戦うことを放棄した俺が言えるセリフじゃない。安田にも結局嘘をついちまつた。やっぱりダメな人間はどんなことがあってもダメなんだな。人間なんて、そう簡単に変わるものじやない。

自暴自棄にもなれず、かと言つて残された命を何かに燃やすこともせず、毎日を惰性で生きている俺にも、死は確実に近づいていた。

いつかは弾が出るロシアンルーレットをやり続けるに等しい、と言う言葉があるが、俺の場合はあの世に向かつて、しかも途中でレールが切れているジエットコースターに乗つているようなものだ。

降りることは出来ないし、乗り続けていればいつか必ず死ぬ。しかも知れないが、自分で選んだわけじゃないし、気が付いたら乗っていた。しかも、どうあがいたところで結局降りられないのだ。多少治療をしてみたところで気休めに過ぎず、延命を施してみてもそれほど残された時間は変わらないだろう。いずれにしても、治療だけで時間が過ぎていくのは嫌だった。面倒くさかった。頑張つても、どうせ結果は同じなのだ。

ならば、無駄な努力はしたくない。この期に及んでも、俺はそういうショボイ人間だった。

ちょうど街に年に一度の祭りの季節がやつてきた。他に何も娯楽がないようなこの街だけに、市民はこの祭りを結構楽しみにしているらしい。

移動遊園地やゲーム、展示会、食べ物屋、聞いた事がないような名前の歌手などがやって来ることになつていて、その一角で俺のよくなき自称ミュージシャンでも参加できるライブがある。事前登録制だと言うので一応名前を入れてみたら、俺も歌えることになつた。ひょっとしたらBBも名前を入れているかな、とも思ったが、名簿を見ても名前はなかつた。

俺の順番は二日目の午後四時から。いつも路上で歌つているのに比べると随分早い時間だが、多分くじ引きで決めたのだろうからしようがない。会場には出演時間の三時間前に入つてくれと言われていたが、俺が着いたのは二時間前だった。準備があるわけでもないし、まあいいだろ。

控え室のようなところに入つてみると、結構知つた顔がある。毎日路上で歌つっているうちに顔見知りになつた奴らだ。もちろん、名前

は知らない。こいつら、何とかしてチャンスをつかもうと必死なんだなと思うと、いいかげんな俺自身についてちょっと申し訳なく思つた。

何となくタバコをふかしながら時間を潰していたが、何だか今日は体の調子がいいみたいだ。出番まで時間がたっぷりあるのでお祭り会場をちょっとだけ歩いてみたが、足取りも軽かつたし、何で作られているか分からぬ食べ物を屋台で買ってみたりもした。こんな気分は久し振りだった。子供の頃に連れて行かれた日本のお祭りの縁日をちょっとと思い出した。

ところが出演者が近づいて控え室に戻つてみると、そんな浮かれた気分が吹き飛ぶような場面に出くわした。多分こいつは俺の前の前の出演者だろう。何があつたのか知らないが、ものすごいブーイングにあつている。おいおい、ここはアポロシアターじゃないんだぜ。そこまでやらなくてもいいだろ。次の出演者はやりづらいだろうな。頼むよ、何とか俺の番までに客の機嫌を直しておいてくれ。

次の出演者は結構人気のあるバンドらしい。出た途端に歓声が沸きあがつた。やれやれ、これなら大丈夫かな。やつたのはロックとラップを混ぜたような今流行りの音楽だ。割と演奏もしつかりしているし、ステージパフォーマンスもいい。なるほど人気があるわけだ。しかし逆に俺にとつてはやりづらいかも知れないな。これだけロックで盛り上がつてしまつと、次にブルースをやるといつにもましてショボく見える。

俺の番が来た。ステージに上がつてみると、途端に会場が静まりかえつた。

あれだけ盛り上がつた後にわけのわからない東洋人が一人でステージに上がってきたんだ、無理もない。

会場を見回してみると若い奴が多い。やりづらいなあ。やっぱり若

い奴らはラップとか今風の音楽が好きなんだろ？。「何だ、こいつ？」という視線が痛い。あーあ、俺もあのブーリングで責められるのか。だいたい、俺がステージで歌うのって何年振りだ？本当に歌えるのか？見てみる、足が震えてるじゃないか。今頃言うのもなんだけど、大丈夫なのか、俺。

とりあえず歌つてみるか。ブーリングに耐えられなくなつたら逃げ出せばいい。

一曲目。

ちょっと様子を見てるために、古い有名な曲をやつてみる。この歌ならここからでも知ってるだろう。
おいおい、どうしよう。まったく反応がないよ。ひょっとして知らないのか、それとも俺の歌がダメなのか。

曲が終わつても何の反応もない。とりあえず、義理でも拍手は普通するだろ？。何だか気持ち悪いな。ひょっとして無視されるのか、俺。いくら余所者でも、そこまで冷たい街じゃないはずだけどな。ブーリングされた方がまだ気が楽だよ。まあいい、それなら好きなようにやらせてもらおう。俺が歌つて気持ちいい曲を歌わせてもらう。客の反応は無視だ。ちょっとだけ、逃げ出す準備もしておこう。二曲目。この曲はマニアックだから知らない奴の方が多いかもしれないな。でも俺が好きな曲の一つだ。

それにしても今日は体の調子がいい。調子が悪い時には出づらい声も簡単に出来る。調子が悪かつたら、行ける所まで行つてステージを降りる積りだつたが、立つたまま歌い続けるのは無理だけど最後まで行けそうな気がしてきた。

二曲目が終わつた。相変わらず反応はないが、ステージで歌うのはやはり気持ちがいい。もうMCなんてやってられない。歌いたいだけ歌つてやる。

三曲目に入つて、急に客席が爆発した。爆発と言つてももちろん爆弾のことではなく、今までまったく反応がなかつた客が、急に一斉に弾けたのだ。

「おお、何だ何だ！？」

しばらくはそれがブーイングなのか歓声なのか分からなかつた。
しかし、それは、歓声だつたのだ。

「おお、そうか。こんなわけの分からぬ東洋人のブルーズを聴いて
くれるのか、お前ら！」

こんな田舎町のちっぽけな祭りのステージだけど、俺にとつてはマジソンスクエアガーデンで歌つている氣分だ。最高に氣分がいい。
お前たちも一緒に歌つてくれ。

そして六曲目を歌つている途中で目の前が真っ白になつた。

「気がついたわね。」

「やあ、ママ。」

俺はママに膝枕されていた。

「俺、何で家に居るの？」

「あんた、ステージで倒れたんだよ。だから、皆で連れて帰つてきたの。」

「そう、でも、じつは普通病院に行くんじゃないの？」

「あんただつて家の方がいいでしょ？」

「ああ、病院なんて行きたくない。」

自分でも分かつた。最後の時が来たと。病院なんかで息を引き取るのはまっぴらだ。

「よひよ。」

BBが居た。

「何でお前が居るんだ？」

「俺さ、・・・。」

そこまで言つたところでママがさえぎつた。

「この子はあんたとちょうど入れ替わり位でうちに住んでたんだけ
どね、あんたと同じで出たつきりで音沙汰無しきね。久し振りに会
つたと思つたらあんたを想いでるし。それより、どうしてあんた達
お互いを知つてるんだい？ここで一緒に住んでたことなかつたろ？」

「まあ、ちょっとね。顔を合わせなくても、ブラザーはブラザーさ。

「最初はお前をブラザーだとは知らなかつたよ。俺は今音楽プロデューサーやってるんだけど、へたくそなブルーズを歌う面白い東洋人を見つけたんで、次に売り出せるかと思つて興味を持つてたんだ。

「それはそれは。でも、残念ながらも俺をプロデュースするのは無理みたいだぜ。といふてBB。」

「？」

「俺もおまえのおかげで、ホット・シングルになら奢れるくらいは稼いだぜ。いつがいい？」

「そうか。でも、貧乏な上に病人のお前に奢つてもひつのは気が引ける。貸しとくよ。」

「そうか。貸しといてくれるか・・・。」

多分この借りは返せそうにない。

「といひでママ、俺はママに懲してたことがある。」

「何だい？」

「実は俺、癌なんだ。しかも、手遅れな上に、すでにタイムリミットを過ぎてる。」

「知つてたよ。と言つても癌だけはつきり知つてたわけじゃないけどね。あんたの顔色と痩せ方を見てれば分かるよ。だからここに帰つて来たんだろう? 最後にブルーズを歌うために。」

「そんなんじゃなかつたんだけどね。最初は、どうせ死ぬんならと思つてママの顔を見に来ただけだったのさ。そしたら、まんまとママの策略にはまつて歌うことになつちました。でも、よかつたよ。最後のステージは気持ちが良かつた。ママには、俺はブルーズの心が分かつてないと言われたままだけど、俺は俺なりに満足してる。」

「そうなのかい、ママ? だって、こいつ、・・・。」

「ああ、BBはリョウの昔の歌を聞いたことがないからね。いいか

い、リョウ、よくお聞き。あなたは昔に比べてテクニック的には全然下手になってる。だけど、ブルーズの心は分かつたようだよ。」

「ああ、おまえ、へたくそだけどブルーズは分かつてないんだぞ。」

歌い続けろって言ったのは、そういうことさ。」

「そうか。死ぬ時になって、俺にもやっとブルーズの心がわかつたか。これでもう思い残すことは何もない。でも、ちょっと遅すぎたかな。俺にはもうブルーズは歌えそうにない。」

「遅すぎるなんて事があるもんかい。ブルーズマンとして死ぬのと、そうでないのとでは、おまえにとっても意味が全然ちがうだろ。」

「ブルーズマンとして死ぬ、か。そうか、そうだよな。俺は日本人として生まれたけれど、ブルーズマンとして死ねるんだな。何も残せるものはないけれど、それで十分だ。大した人生じゃなかつたけれど、楽しかったよ。生まれ変わつてもまたママの子に生まれたいな。」

遠くからマーティ・ウォーターズが聞こえてきた。

ママとBBが何かしゃべっているが、俺の耳にはもう何も聞こえないかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7093d/>

「アイ・フィール・ライク・ゴーイング・ホーム」

2010年11月2日03時54分発行